

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「接合」から資本主義を考える＜共同研究：
グローバル資本主義における多様な論理の接合：
学際的アプローチ＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010018

「接合」から資本主義を考える

中川 理

接合という考え方

「資本主義」という言葉はものものしくて、かんたんには口に出しにくい雰囲気を持っている。何かしら、その言葉を使ったとたんに自分の立場が固定されてしまうように感じるからかもしれない。たいがい、その言葉を使うのは資本主義に批判的な人たちだからだ。しかし、賃金労働を用いた合理的な利益の追求の実践として資本主義を単純にとらえるならば、よいにしろ悪いにしろ私たちはそれと深くかかわっていることに気づく。多くの人は民間企業で働いて給料をもらっている。もしそうでなくとも、消費者として資本主義的に作られた商品に囲まれて生きている。私たちの生活は、資本主義と切り離しては成り立たない。そのことは、アジア、アフリカ、オセアニアなど人類学が対象としてきた地域についても当てはまるようになっている。おおまかにいえば、私たちは資本主義的な世界に生きている。

だからといって、生活のすべての側面が資本主義の仕組みで組織されるようになっていくかというと、もちろんそうではない。たとえば、料理や掃除といった家庭内の仕事は、妻や夫を雇ってやっているわけでもなければ、利益を最大化しようとしているわけでもない。しかし、誰かが給料をもらってこなければ家庭生活が成り立たないという意味では、資本主義と結びついている。資本主義のほうも、労働者が家庭において次の日も働くための力を蓄えることなしには成り立たない。このように考えるならば、資本主義はそれとは異なる

論理で動く家庭の領域と結びつくことで成り立っていることが見えてくる。

贈与という実践に注目したときも、同じことがいえる。デパートで買った商品をきれいに包装して贈るクリスマスのプレゼントは、資本主義と贈与の世界が異なりつつ切り離せないことを象徴的に示している。また、こちらは少し分かりにくいのが、家族経営の農家のような自営業の場合もじつはそうだ。仕事と家庭を切り離せない農家は資本主義的な企業ではないけれど、スーパーに生産物を卸すといったかたちで資本主義と結びついているからだ。このような例は、他にもさまざまなかたちで存在している。この点に注目して、資本主義は異なる論理で動く諸領域との「接合」をとおして成立していると、より一般的に考えてみるができるだろう。

グローバル資本主義が生み出す新たな接合

この接合という思考の道具を使ってみると、現在のグローバル化した資本主義がとても興味深い状況を作り出しているように見えてくる。すべてを包み込んでいくというイメージと違って、グローバル資本主義は異なる領域のあいだの接合をより多く作り出している可能性があるからだ。

この数十年の資本主義の変容は、「フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行」や「経済的グローバリゼーションの進展」といった概念でとらえられてきた。その見方によると、一国の一企業のなかで生産を完結させる従来のモデルから、世界各地をネットワーク状に結びつけてよりフレキシブルに生産を行うモデルへと、資本主義のモデルは移行している。工場での製造だけでなくコールセンターなど多くの業務が、より安価に行える発展途上国にアウトソーシングされるようになっていく。同時に、先進国の国内においても、一時雇用を増やすとともに派遣労働やフリーランスに業務を外部委託することで、企業はより柔軟で低コストの経営を推進している。その結果、同じ国や組織に所属していない多様な人びとが、世界規模に広がる生産のネットワークのなかで、互いに結びつけられるようになっていく。

このような状況が、異なる論理のあいだの新しい出会いを世界のあちこちで引き起こしている。たとえば、人類学者アナ・チンは、マツタケのサプライ・チェーンを追うことでその点を具体的に示している(チン 2019)。アメリカ山中でのマツタケ狩りは、東南アジア難民やベトナム帰還兵など雑



床掃除をする家事労働者女性 (2017年3月、インド・ムンバイ、田口陽子撮影)

中川 理（なかがわ おさむ）

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。専門は文化人類学、グローバリゼーション研究。近年の仕事として、『かかわりあいの人類学』（共編著 大阪大学出版会 2022年）、『不確実性の人類学—デリバティブ金融時代の言語の失敗』（アルジュン・アバドゥライ著 共訳 以文社 2020年）などがある。

多な人びとによって、労働ではない自由な活動として行われる。しかし、周縁において自由の象徴であるマツタケは、貿易業者の手に渡ると大きな利益をもたらす資本主義的な商品となり、最終的には高級な贈り物として日本で消費される。ここでは、異なる論理で動く複数のニッチが「翻訳」をとおして結びつくことで、マツタケのサプライ・チェーンを成り立たせている。マツタケはマイナーな商品にすぎないが、このような「サプライ・チェーン資本主義」のとらえ方は、より広く活用することができそうだ。グローバル資本主義が結びつける諸領域のあいだの接点でいったい何が起きているのかを、同じようなやり方で問うてみたらどうだろうか。

接合を描き、理論化する

私たちの共同研究は、このような発想にもとづき、課題名のとおりに「グローバル資本主義における多様な論理の接合」について考えようとする試みである。すでにお分かりのように、対象とするのは資本主義という言葉と聞いたときにイメージする経済的实践だけではない。そうではなくて、人びとが追及するより幅広い生き方や願望に注目して、それらが現在の資本主義とどのように接合しているのかを、本研究は明らかにしようとする。そして、接合からどのような新しい生き方や願望が生まれ出てくるのかを考えようとする。このようなアプローチは、近年の人類学による資本主義研究が表明している考え方や、出発点を共有している（たとえば、Bear et al. 2015）。そこから前に進んで、たんに個別の事例を理解するだけでなく、比較をとおしてどのような理論を引き出せるか考えることが、この共同研究の目的となる。資本主義は人びとの多様な願望を取り込むことで成長していくのだろうか。それとも、見えてくるのは資本主義とうまく結びつきながら自分たちの願望を実現する人びとの姿なのだろうか。あるいは、（おそらくそうなるだろうが）より繊細な理論的枠組みが必要となるのだろうか。

この共同研究では、経済の文化社会的側面に注目する研究分野である人類学・社会学・地理学による学際的アプローチによって、事例の比較と理論の構築を進めていく。傾向としては、人類学は周辺の諸民族と資本主義との接合に注目してきたのに対して、社会学はいわゆる先進国における資本主義の変容の経験に、地理学は生産や消費に関わる空間の配置と表象に注目してきた。重なり合いつつも違った点に注目す



スッキーニの苗を植える難民出身のモン農民とエクアドル人農業労働者（2016年3月、フランス・ガール県、筆者撮影）

る三分野の視点を組み合わせることで、本研究はより包括的な理解の枠組みを生み出そうとする。

フランスの食品流通産業とラオスから難民として来たモン農民の関係、ブラジルのダイズ産業と小農や先住民との関係、アジア在住のアフリカ系商人のインフォーマル経済と資本主義の接合、ニューギニアにおける貝貨の製造・輸入のビジネス化、日本の高齢者サービスにおける介護労働と同性愛カップルのケア、インドにおける家事労働者と雇用者家族の関係、エチオピアから中東に出稼ぎに来た家事労働者女性の経験など、共同研究への参加者が取り組む事例は地域的にもテーマ的にも多岐にわたる。これらの多様な事例の比較をとおして、いったいどのような理解を生み出すことができるのか、共同研究会を始めようとしている現時点ではまだ予測できない。しかし、これら雑多な経験の出会いからこそ大胆な資本主義のとらえ方が生まれるのではないかと、私たちは期待している。

引用文献

- チン, A. 2019 『マツタケ—不確実な時代を生きる術』 赤嶺淳訳, 東京: みすず書房。
- Bear, L., K. Ho, A. L. Tsing, and S. Yanagisako 2015 Gens: A Feminist Manifesto for the Study of Capitalism (Theorizing the Contemporary). *Fieldsights* March 30. <https://culanth.org/fieldsights/gens-a-feminist-manifesto-for-the-study-of-capitalism>